



# Malawi Voice vol.15

～アフリカの国・マラウイからのおたより～

青年海外協力隊 平成27年度3次隊

言語聴覚士 飯田知美

## ごあいさつ

9月18日（月）から新年度がスタートしました。今学期は12月下旬までなので、1月に帰国する私にとっていよいよ最終学期を迎えました。先日首都に行った際、最後の先輩隊次である平成27年度2次隊の皆さんが帰国するのを見送りました。次はいよいよ自分たちが帰国する番か…と、急激に任期があと少ししかないことを実感し、焦りと寂しさを感じました。

8月上旬に、JICAの安全対策会議が首都のリロングウェで開催され、全ボランティアが出席しました。毎年2回ずつ開催されるため、今回が3回目になりました。普段は自分の任地をなかなか離れることがなく、週末に隣の県に買い物に行くことがあるぐらいなので、街の変化や、知らないボランティアの数の多さに驚きました。JICAボランティアは年に4つの次隊に分けて派遣されます。マラウイでは4次隊（3月頃派遣国に着任する隊次）での受け入れがない年が多いので、大体年に3回、7月、10月、1月頃に新しいボランティアの方が着任してきます。今回は私がマラウイに来てから最も多い26名の新ボランティアが着任したので、首都の隊員ドミトリーも賑やかでした。先輩隊次の皆さんが帰国され、いよいよ私たちが一番の“現役先輩隊次”。「あれ？そんなにマラウイにいたっけ…？」というのがまだ正直な気持ちです。

さて、今回首都に滞在している間、新隊次のみなさんからもよく、「何をどこで買ったらいいの？」「〇〇が欲しいけどマラウイでも買えるの？」「私の任地はへき地で、日常の食料調達どうしよう…」といった、“買い物”に関する質問や不安の声を多く耳にしました。任地に赴任する前に、どんなに首都で買いためをしようが、普段の買い物は当然地元ですることになります。途上国というと、何でも日本よりも物価が安いと思っていた私ですが、物によっては（特に現地の人あまり手にしないものは）実は日本で買った方が安いものもありました。「マラウイに行ったら手に入らないものばかりだから、あれもこれも日本から持って行かなくちゃ…」と、日本で出国準備の時にせっせといろいろな物を買そろえましたが、値段や品質、店までの運賃を気にしなければ、案外いろいろな物が手に入ります。

ということで、今回と次回で、途上国の農村部で生活をする私たちボランティアが、日用品から食料、消耗品、その他の必要なものまで、どのように手に入れているのかをご紹介します。

2017年9月

飯田知美

# マラウイの買い物事情 Part.1



前回のおたよりで紹介した通り、“マラウイ”と一口で言っても、地域や家庭によって経済状況も様々です。経済状況により、日常の買い物の仕方異なります。主な食品や日用品の買い物先として、「スーパー」「マーケット」「食料雑貨店（キオスク）」「その他」の4つに分けてご紹介します。

## 1. スーパーマーケット

日本でいう一般的なスーパーと同じです。マラウイでも「CHIPIKU」「Peoples」「Shoprite」といったいくつかのチェーン店があります。その中で一番大きい「Shoprite」は3大都市（リロングウェ、ブランタイヤ、ムズズ）にあります。名前は「Shoprite」ですが、規模の小さい店はゾンバ、リンベなどの中堅都市にもあります。都市の規模問わずに、小都市や比較的大きな農村部にも見かける“身近なスーパー”は「Peoples」です。私が住むブンブウェの県庁があるチョロにも、Peoplesがあります。チェーン店の他にも、個人経営の小さなスーパーは全国にたくさんあります。しかし、こういった店で買えるものは、上の3つのチェーン店と比べると、品数はかなり少ないです。



私がマラウイに来て一番利用しているスーパー「CHIPIKU」です。ブランタイヤにあり、家から自転車タクシーとミニバスを乗り継ぎ、約1時間半～2時間程の所にあります。どんな物が売られているか、少し店内をのぞいてみましょう。

＜生鮮食品コーナー＞



＜日用品（掃除道具、文房具）コーナー＞



＜お菓子コーナー＞



＜調味料コーナー＞



## 2. マーケット（市場）

地元の方のもっとも一般的な買い物先はマーケット。野菜や果物、肉、魚などの生鮮食品から、パン、ソヤミート、スパゲッティなどの、地元の人に馴染みのある加工食品、さらにはパウラー（チャコールコンロ）やくわなどの生活用品、衣類・チテンジ・石鹸・バケツなどの日用品まで幅広く売られています。マーケットによって規模の大きさにかなり差があります。ブンブウェのマーケットは規模としては全国的にも大きな方だと思いますが、同じ物を売っている人（ほとんどトマトなどの野菜）が多いため、品ぞろえの点では、小さなマーケットとそんなに変わらないのでは…と思います。私も野菜、パン、ソヤミートなどの食品や、農業用品、バケツなどの日用品で手に入る物はここでいつも購入しています。



左 マーケット横の牛肉屋さん  
下 マーケットのバケツ売り場  
右 マーケット野菜売り場



## 3. 食料雑貨店（キオスク）

家の一部をお店にしたり、小さな小屋を建ててお店にするなど、スーパーよりもかなり規模の小さい小売店です。全国いろいろな所で見かけ、特に農村部では食料や石鹸などの生活必需品を手に入れる大切な役割を果たしています。日本でいう「コンビニエンスストア」のような“身近で必要最低限な物の仕入先”です。私の学校の敷地を出た所にも1つあります。事務連絡が立て込んで携帯電話の残金が亡くなってしまったとき、ちょっと小腹がすいたとき、大雨で任地から出られなくなり買い物に行けないとき、私にとっての救世主がこのキオスクです。

左 とある村のキオスク  
下 私の学校横のキオスク  
右 ブンブウェマーケット横の大きめのキオスク



## 4. その他

“お店”と名前が付く場所以外でも、マラウイではいろいろな商売の形があります。

### <露店（道ばた販売）>

村を歩いていると、道の途中でバケツにマンダシ（揚げパンのようなもの）を売っている人がいたり、ござや大きめの石の上にトマトや小魚を置いて売っている人もいます。マラウイで生活していると、この“透明バケツ”の売り子さんを至る所で見かけます。



この人は飴とタバコを販売中。タバコは箱買いではなく、1本ずつ販売しています。

### <歩き売り>

大きめのミニバス乗り場を中心に、ダンボールにお菓子やタバコ、携帯電話のユニットを積んだ人が物を売っています。バスが乗客の乗り降りや警察の検問で停車している間、大勢の売り子がバスを取り囲み、物を販売しに来ます。日本のように“お弁当”の習慣がないので、バスに乗って長距離移動する人々は、だいたいこの車外販売を利用してお腹を満たしています。手が届かない場合はお金を車外に投げ捨てるようにして支払うので、最初の頃はやや抵抗がありました。



ある日の高速バスの車窓から。真ん中の人が売っているのは手作りポテトチップスです。右の人は飲み物を販売中。

### <自宅販売>

特に物を売るスペースを持たず、おやつを中心に家に買いに来る人に物を売っている人もいます。私の学校でも、多くの先生がマンダシ、袋アイス、豆の揚げ物、ポップコーン、ふかし芋などを販売して、生徒たちに売っています。日本のような「営業許可証」の制度はないのでしょうか。

今回は、主に営業形態についてお話ししました。交通事情の厳しいマラウイでは、大きな道路から離れて暮らす人でも物が手に入るように、いろいろな形で物の売買が行われています。さらに、隣近所の人へのおすそ分け文化もあったり、突然家に人が来ても嫌な顔一つせず食事をふるまってくれる文化もあります。この支え合い・助け合いの文化は、私たち外国人相手でも変わらず、特に自分の任地では本当に暖かく迎え入れてくれます。



## 6～8月の活動の様子



### 【6月】

前回のおたよりでお話したように、6月の大半は先生による「ストライキ」でまともに授業ができない日々でした。代わりに授業を行う日もありましたが、活動の見学や、マラウイの聴覚障害連盟（※1 MANAD）への訪問などをしていました。そして7月には、約1年半ぶりに北部の大都市「ムズズ」に活動見学に行くことができました。そこで2名の隊員の活動を見学させてもらったので、うち1名を隊員紹介で掲載したいと思います。

※1「MANAD」とは…Malawi National Association of the Deafの略称で、マラウイの聴覚障害者協会です。本部が南の大都市ブランタイヤにあり、全国29カ所に支局があるそうです。“協会”というとても大きい組織のようですが、実際に本部にいるのは7人（うち2人は警備員で1人はドライバー）です。そのうち3名が聴覚障害当事者で、責任者の方も聴覚障害の方でした。詳しく知りたい方はウェブサイトでは活動内容などが確認できます。（<http://www.manadmw.org/>）

### 【7月・8月】

7月はテスト週間。その後はターム休みに入りました。JICAの行事（安全協議会）で首都のリロングウェに行く機会があったので、首都近郊に住む生徒の自宅を訪問したり、任地に戻ってからほとんど卒業生達と過ごしていました。みんな通常の（特別な支援がない）セカンダリースクールに通っているため、学校での苦労話がつきません。

また8月には、マラウイの子ども用「ヘルスパスポート」（日本の母子手帳のようなもの）の改訂に向けての取り組みのため、北部と南部の4カ所の病院とヘルスセンターに行きました。この取り組みについては、次回のおたよりで詳しくご報告します。

### ～ 活動・生活の様子 ～



ある日の女子寮。みんなで寸劇をして遊んでいます。デフの生徒達は“見る力”と“表現力（再現力）”がとっても豊か。この寸劇を見ているとマラウイの家族の日常が、直接見ていなくてもなんとなく想像できてしまいます。

ニュージーランドからのボランティアの2名は、半年間の任期を終えて、6月に帰国しました。最終日の前日に、先生たちみんなで送別会。「じゃあ最後に…」と、突然英語で別れのあいさつを求められ、ヒヤヒヤでした。





先生の家に生徒とお邪魔しました。私がマラウイに来てから生まれた赤ちゃん。かなり大きいですが、まだ1歳未満の赤ちゃんです。こんな風に突然家に行ってもいつでも歓迎してくれます。



ムズで「障害児・者支援」の職種で活動している隊員の任地見学の様子。この施設では、様々な障害を持つ人が、大工や家庭科、アートなどのコースに分かれて職業訓練を受けていました。海外の団体が運営するとてもきれいな建物でした。JICA ボランティアは、全てのコースの受講者に対して、PCの授業を担当していました。



自宅の畑の玉ねぎ収穫。私一人では全く手に負えないので、遊びに来た卒業生たちがお手伝い。そして500個近い玉ねぎは私一人の胃袋ではどうにもならないので、そのまま大量におすそ分け。

リロングウェの生徒の家。大工さん家族が敷地内に住んでいるので、2軒で子どもたちの数は合計10人。たくさん子ども達に囲まれてほとんど保育園状態。久しぶりにトンネルを作って砂遊び。貴重な水で遊んでしまったので、その後はみんなで水くみ。



マラウイで人気のおもちゃ。手作り車（上は拡大版）。この車はなんと、彼の手作り。写真では見辛いですが、小さなライト付。しかしこの写真の少年は農村部育ちでおそらくセカンダリースクールには行けないとのこと。こういう才能のある子が活躍できるような国になってほしい…と強く願った瞬間でした。



## 隊員紹介



隊員紹介がまた久しぶりになってしまいました。今回は、1年半ぶりに北部に活動見学に行くことができたので、普段あまり会うことのできない北部の隊員をご紹介します。白井悠隊員は、もともとバングラデシュ派遣の隊員で、実際に1ヵ月弱バングラデシュで派遣後の研修を受けていました。しかし、バングラデシュの治安状況が悪化し、緊急帰国ののち、派遣先の変更でマラウイに派遣されました。もともと私よりも3ヵ月派遣の早い隊次のため、9月に任期を終えて帰国しました。今回の活動見学では、配属先のヘルスセンターの見学と、村でのHIV/AIDS啓発活動、コンドームのデモンストレーションを見学しました。見学の様子は次のページに掲載しています。



### 隊員情報

(掲載内容は本人より了承を頂いています)

名前：白井 悠 (しらい はるか)

隊次：平成27年度8次隊

職種：感染症・エイズ対策

配属先：ムジンバ県カウェチヘルスセンター

出身：新潟県

### ～隊員からのメッセージ～

みなさん、初めまして。2016年3月よりマラウイ共和国で活動しています、白井悠です。感染症・エイズ対策という職種で、北部のカウェチヘルスセンターに配属されています。

みなさんご存知かもしれませんが、サブ以南アフリカのHIV陽性者数は世界全体でもっとも多く、サブ以南アフリカの1つであるマラウイのエイズ感染率は人口の9.1% (2015年、UNAIDS発表) と言われています。

私は現地NGOのスタッフと一緒に村を訪問し、若年層に向けたHIV/AIDS予防啓発及び性教育を行っています。マラウイでは初等教育、日本でいうと小学校2～3年生くらいからHIV/AIDSに関して学びます。マラウイの学校では基本的に暗記して覚える学び方が多いのですが、私は「自ら考える」ということを大切にしています。特に一番力を入れているコンドームの正しい使い方講座では、私は一切正解を言いません。「なんで?」「どうやって?」「次はどうするの?」と根気よく質問します。全然答えてくれなくて投げ出したくなることもあります。意見を出してくれるのをひたすら待ちます。私が予想しなかった答えが出てきたりすることも多く、毎回新しい発見があってとても面白いです。

日本と同じく、ここマラウイでも「性」の話をオープンにできる場所は少ないですが、エイズ啓発はもちろん、望まない妊娠や性感染症など自分の身を守ることはとても大切な事柄だと思っています。これからも「性」について話し合える場づくりをしていきたいと思っています。

白井 悠 (2017年7月)

## ～白井隊員活動見学～



カウエチェヘルスセンターの一部。北部の大都市ムズズから車で約 20 分の所にあります。敷地が広くて、のどかな場所。

HIV/AIDS の啓発のためのワークショップ。30～40 分程歩いて村へ向かい、村長さんの家の前の広場で実施しました。あらかじめ村の青年リーダーの人がワークショップの声掛けをして、対象の村人が集まってきました。



最初は HIV/AIDS に関する講座。内容は、言葉の意味や、感染の仕方など。「説明をする」という一方的なものではなく、村の人に質問をしたり、〇×クイズをしながら、参加型の講座になっていました。隣のマラウイアンスタッフが、トゥンブカ語（主に北部の現地語）に通訳しています。



コンドームのデモンストレーションの様子。実施にコンドームの実物と疑似男性器を使用して説明。ここでも、質問をしながら参加者が興味を持って参加できる工夫がされていました。参加者が恥ずかしがったり、ふざけたりすることなく、特に男性参加者の真剣な様子が印象的でした（参加者の態度や意欲は村によって異なるそうです）。質問もたくさん出ていました。

